

令和6年度

しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業  
～大学連携による地域課題への取り組み～

研 究 成 果 報 告 書

令和7(2025)年4月

しずおか中部連携中枢都市圏



# 令和6年度 しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業 成果報告書

- 1 大谷・小鹿地区のまちづくりにおけるソフト事業の展開 . . . 1  
(静岡大学グローバル共創科学部教授 杉山 康司)(静岡市 都市局都市計画部大谷・小鹿まちづくり推進課)
- 2 企業課題や産業ニーズに応える高度専門人材育成(リスキング)講座の開発 . . . 5  
(静岡大学地域創造教育センター講師 辻本 侑生)(静岡市 市民局生涯学習推進課)
- 3 静岡県立川根高等学校の魅力化向上 . . . 9  
(静岡大学情報学部教授 永吉 実武)(川根本町 教育委員会教育総務課)
- 4 外国人住民の住みやすさ向上 . . . 13  
(静岡大学人文社会科学部教授 張 盛開)(川根本町 経営戦略課まちづくり推進室)
- 5 就活生に興味を持ってもらうための情報提供 . . . 19  
(静岡県立大学経営情報学部准教授 上原 克仁)(牧之原市 総務部総務課)
- 6 静岡県立川根高等学校の魅力化向上 . . . 23  
(静岡県立大学薬学部講師 刀坂 泰史)(川根本町 教育委員会教育総務課)
- 7 認知症の正しい理解の促進に寄与する啓発ツールの開発 . . . 27  
(静岡県立大学経営情報学部教授 東野 定律)(静岡市 保健福祉長寿局地域包括ケア・誰もが活躍推進本部)
- 8 しずまえ鮮魚を用いた冷凍寿司の開発 . . . 31  
(東海大学海洋学部水産学科准教授 清水 宗茂)(静岡市 経済局農林水産部水産振興課)
- 9 しずまえプロモーションの提案・実践 . . . 36  
(東海大学海洋学部水産学科教授 後藤 慶一)(静岡市 経済局農林水産部水産振興課)
- 10 しずまえ水産物の認知度の向上に向けて . . . 41  
(東海大学海洋学部水産学科准教授 李 銀姫)(静岡市 経済局農林水産部水産振興課)
- 11 「介護予防」普及啓発に向けた分かりやすい広報戦略 . . . 45  
(常葉大学造形学部・造形学科教授 安武 伸朗)(静岡市 保健福祉長寿局地域包括ケア・誰もが活躍推進本部)

- 12 コロナ後のテレワークの需要調査と市内テレワーク施設紹介資料の更新 . . . 49  
(常葉大学経営学部・経営学科教授 小豆川 裕子)(静岡市 総合政策局企画課)
- 13 日本平動物園のPR・集客に繋がる連携事業の実践! . . . 53  
(常葉大学法学部・法律学科特任教授 丸岡 浩三)(静岡市 観光交流文化局日本平動物園・選挙管理委員会事務局)
- 14 外国人コミュニティとの共生に向けた取組 . . . 57  
(常葉大学教育学部准教授 那珂 元)(島田市 観光文化部文化振興課)
- 15 「町民一人一スポーツの実現」に向けた事業運営戦略 . . . 61  
(常葉大学健康プロデュース学部准教授 村本 名史)(吉田町 教育委員会事務局生涯学習課スポーツ振興部門)
- 16 川根本町における外国人住民の住みやすさ向上 . . . 65  
(常葉大学健康科学部・看護学科教授 白石 葉子)(川根本町 経営戦略課まちづくり推進室)
- 17 日本平動物園のPR・集客に繋がる連携事業の実践! . . . 69  
(静岡英和学院大学短期大学部・現代コミュニケーション学科教授 重森 雅嘉)(静岡市 観光交流文化局日本平動物園)
- 18 「和菓子バル」を通じた、大井川川越遺跡のPR手法の提案 . . . 73  
(静岡英和学院大学人間社会学部・人間社会学科教授 畑 恵里子)(島田市 観光文化部博物館課)
- 19 スポーツツーリズムにおける消費動向把握と効果的な観光DX推進について . . . 78  
(静岡産業大学経営学部准教授 万浪 靖司)(藤枝市 スポーツ文化観光部観光交流政策課)
- 20 中心市街地の遊休不動産が増加している・新規出店者が入ってこない . . . 82  
(静岡産業大学経営学部教授 小泉 祐一郎)(島田市 産業経済部商工課)
- 21 「和菓子バル」イベントを通じた、大井川川越遺跡のPR手法の提案 . . . 87  
(静岡産業大学経営学部特任教授 中山 勝)(島田市 観光文化部博物館課)
- 22 日本平動物園のPR・集客に繋がる連携事業の実践! . . . 92  
(静岡産業大学経営学部准教授 岩本 武範)(静岡市 観光交流文化局日本平動物園)
- 23 養護者による高齢者虐待防止の啓発について . . . 96  
(静岡福祉大学社会福祉学部・福祉心理学科教授 檜木 博之)(静岡市 保健福祉長寿局地域包括ケ

ア・誰もが活躍推進本部)

24 幼児向け環境学習プログラムの開発と実践 . . . 100

(静岡福祉大学子ども学部・子ども学科教授 坂田 尚子)(静岡市 環境局環境共生課)

25①困難な問題を抱える女性の実態把握及び②支援につなげる広報手段 . . . 104

(静岡福祉大学社会福祉学部・健康福祉学科准教授 渡辺 央)(静岡市 市民局男女共同参画・人権政策課)

26 移住・定住・交流人口の増加に向けたプロモーション強化 . . . 108

(関東学院大学法学部・地域創生学科教授 牧瀬 稔)(焼津市 経済部誘致戦略課)

静岡大学 グローバル共創科学部 杉山研究室

教 員：教授 杉山 康司

参加学生：上野都、宮下真彩、後藤麻衣、他

## 1 要約

### 事業計画

本取り組みは大谷・小鹿周辺におけるまちづくりにスポーツ健康科学分野の総合知を活かし、スマートウェルネスシティづくりの一端を担うものとして計画した。実際に取り組むことができた内容としては、①静岡大学キャンパスでウォーキング・スポーツステーション（以下WSS）を開催し、大学におけるスポーツウェルビーイングの知を地域に還元する試み、②静大等の施設でスポーツを専門とする学生が簡易体力テスト診断やニュースポーツ体験会を開催し、地域住民の健康啓発活動を行い、さらに、③これらの活動がさらに継続的取り組みへと発展できるような地域のコミュニティ & 安心安全（見守り隊活動）とウェルネスを期待するランニング、ウォーキング、サイクリングコースの提案を行った。

## 2 研究の目的

本取り組みは大谷・小鹿周辺におけるまちづくりにスポーツ健康科学分野の総合知を活かし、スマートウェルネスシティづくりの一端を担うことができるかを実践し、将来の街づくりに向けた提案を行う。

## 3 研究の内容

- ① 静岡大学キャンパスでウォーキング・スポーツステーション（以下WSS）：学内ウォーキングマップ（ファルトレクコースへ発展）の作成と一ヶ月間の学内開放を行った。学内ウォーキングマップはWSSをウォーキングコースの拠点として活用できることに加え、静岡大学の坂や豊かな自然を生かしたウォーキングコースを作成した。また、学内開放では学内のスポーツ施設を利用できる期間を設けた（図1）。この期間中、週に一回のイベント「一生涯の健康づくりin静岡大学」を開催し、大学が保有する実験機器を活用した体力テストや身

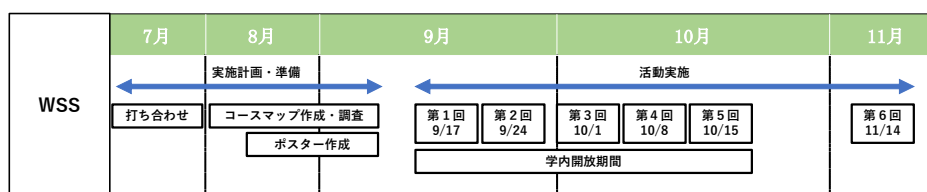


図1. WSSスケジュール。

体組成の測定、ニュースポーツ体験を実施し、運動生理学を専門とする学生たちによる個別のフィードバックを行った。

- ② 静大等の施設におけるスポーツを専門とする学生による簡易体力テスト診断およびニュースポーツ体験会：9月15日（日）午後から静岡大学において「お気軽体力チェック～考えながらニュースポーツ～」を開催した。また、11月16日（土）には富士見台2丁目公園において「秋の大運動会～楽しい体力チェック～」を実施し、どちらも参加者から高評価をいただくことができた。また、その他大谷小鹿外の地域から学生の協力依頼を受け町内イベントにニュースポーツのブースを開設してコミュニティづくりに貢献した。
- ③ 地域のコミュニティ&安心安全+ウェルネスを期待する周回運動コースの提案：安心安全なま

ちづくりを目指し、恩田原スポーツ公園を中心としたウォーキング・ランニング・サイクリングコースの作成を行った。作成には見聞調査とコース実走およびアンケートを行い今後の課題を見つける手掛かりとした。

#### 4 研究の成果

##### (1) 当初の計画

自治会主催のお祭りでのスポーツブース（スポーツを専門とする学生が簡易体力テスト診断やニュースポーツ体験会）あるいは静大およびその周辺施設を利用した独自のスポーツイベントを開くなどの健康啓発活動を行う。また、スポーツ活動を通じた安心安全街づくりを目指した定期的スポーツ活動による見守り隊活動を企画し、地域住民の日常生活において静岡大学学生のサークル活動等を身近に感じることができるよう試み、これらの活動がさらに継続的取り組みへと発展できるようなランニング、ウォーキング、サイクリングなどのコース提案をする。

##### (2) 実際の内容

静岡大学キャンパスでウォーキング・スポーツステーション（以下WSS）を開催し、大学におけるスポーツウェルビーイングの知を地域に貢献する試みを行った。②恩田原スポーツ公園等の施設でスポーツを専門とする学生が簡易体力テスト診断やニュースポーツ体験会を開催し、地域住民の健康啓発活動を行った。③これらの活動がさらに継続的取り組みへと発展できるような地域のコミュニティ&安心安全（見守り隊活動）とウェルネスを期待するランニング、ウォーキング、サイクリングコースの提案を行った。見守り隊活動では10月と11月の2か月間、日常生活を送りながら各自で活動を行ってもらい、Google Formsを用いて活動報告を集計した（12名の学生が協力してくれた）。

B一部修正 当初予定していた自治体主催のお祭りでのブースが富士見台2丁目のイベントと重なってしまったため開催しなかった。定期的見守りたい活動については平日の活動時間や土日でのスポーツ活動の調整が現実的には難しく、一部の部活動に協力を得るにとどまった。

##### (3) 実績・成果と課題

WSS：WSSでは学生が主体的に日常生活の中で地域安全の意識を持つこと、学生と地域の方がスポーツを通して交流を行うことを実践でき、これまで以上に健康づくりに関するサポートや地域と学生の関わりを増やすことができた。こうした拠点を地域の公民館や公園にも増やしていくことができれば、大学と地域が連携し、スポーツ活動の場の提供、健康スポーツ人口の増加を期待できると思われる。また、地域安全見守り隊は日常生活の移動中や、ウォーキング中の小さな意識で成り立つ活動であることを参加者の声から実感した。

お手軽体力チェック（静大）&富士見台2丁目秋の大運動会、各自治会のお祭り交流：簡便性のある体力チェックを活用し、参加者自身の体力の確認の機会を提供することで、イベントを介した地域住民のウェルネスとコミュニティ意識の促進に役立てることができた。また、富士見台二丁目自治会の協力のもと静岡大学（杉山研究室）が開催した秋の大運動会（11月16日）は参加者の笑顔が絶えず、スポーツを多世代で楽しむ様子がみられた。イベント後のアンケートでは「地域交流のイベントは防災の意味でもいい活動である」「多世代でスポーツができて楽しかった」などの声が多く、近隣住民の結束力を高め、共助を促すきっかけを与えられたのではないかと感じた。また、「これからの生活において運動、スポーツを続けたいと思うか」「本イベントを通して、新たに学んだこと・知ったことはあったか」という質問に対し、多くの方から肯定的な回答を得られ、イベントを通して自身の体力を確認し、運動習慣の形成に向かって取り組もうと感じた人が多いと思われた。各自治会から学生に声をかけていただいた地域との交流においても学生のよい若い力を必要としている地域が多いことを改めて感じることもできた。

周回運動コースの提案と周回コースの安心安全（見守り隊）活動：R5年度から、学生の地域安全に対する意識や地域に貢献する意識の向上を目的とし、日常生活の一部を活用しながら「地域安全見守り隊」という名の下「しずおか防犯パトロール」を行ってきた。本年度は、部活動に所属する学生が主体的に本活動を行うことで、普段は関わることはない他の部活動に所属している

学生同士での交流を増やすことに力点を置いて呼びかけてみた。結果、12名の学生が呼びかけに応じてくれた。多くは部活動で大谷小鹿周辺をトレーニングとしてランニングするときが多かった。部活動が固定された曜日や時間帯で行われるということを活かし、定期的な防犯サイクルを確立させ習慣的な見守り隊活動を促進させることで、防犯効果の向上を目指せる可能性が成果として得られた。また、ウォーキング・ランニング・サイクリングコースの作成においては二種類コースを検討した。見聞により、交通状況や道幅、距離、見通しなどをテーマにコースを設定し、見守り隊活動としてコースをウォーキング、ランニング、サイクリングと周回しながら実践的検討を行うことによってコースを確定した。一つは「大谷・小鹿を巡る開発地区コース」、もう一つは「駿河を感じる大谷川コース」とした。コースを作成するにあたり、今後のバス停や新たなバスルート、休憩場所やレンタルサイクル置き場などの構想が浮かび上がった。また、YouTubeを使ったコース案内動画やマップが完成した。

#### (4) 今後の改善点や対策

- ① WSSの活動は継続・拡大によって、学生を含めた街全体での健康意識、地域安全意識の向上や、学生と大谷・小鹿地区の交流機会の場を増やしことにつながる事がわかった。しかし、大谷・小鹿開発地域においてこうした取り組みができる施設の充実などを計画に盛り込むことが急務と思われる。
- ② 昨年度よりも今年度の方が企画したイベントに対する反応が良かった。その背景には教員、学生が積極的に地域のお祭りなどに参加して関係者と交流したことあげられる。学生が地域で活躍する場をもっと多く創出する必要がある。
- ③ 「しずおか防犯パトロール」という観点からは年間を通して活発な活動が必要なのかもしれない。本研究では部活動の学生たちを対象に試みたが、継続するには十分な動機付けに至らなかったことがあげられる。学生参加を促すには若者が集う施設や店舗を充実させることが求められる。また、こうした活動は地域で若者が住みやすい、住みたいと感じるコミュニティづくりが重要であると思われた。周回コースづくりではわかりやすいHPやマップ作り、YouTubeを使ったコース案内動画を利用したコース紹介やイベントなどを町内で行っていただき、日々の健康づくりに活用しながら防犯レベルをアップさせることが大切である。また、この取り組みで若者の視点からバスの路線や休憩所、工業倉庫の屋上を展望台兼避難場所にすることによる企業の社会貢献、CSRを充実させていければという声が上がった。

### 5 地域への提言

本研究では大谷・小鹿地区住民の健康づくりの意識向上を目的とした様々な活動を行ってきた。ここでは、今後の更なる地域発展のためのまちづくりビジョンについて2つの提案をしたい。

一つ目は商業施設の設立提案である。大きな建物や道路の開発・整備が進められ、日陰が増え、歩きやすい道となりつつあるが、今年度設立された建物には工業・物流に関する建物が多く、地域住民の方々が直接訪れられるような娯楽のスポットとして活用することはできない状況である。加えて、これまで開発地域の魅力の一つであった「富士山が綺麗に見える」というポイントが、新しい建物によって遮られてしまい、富士山が見えなくなってしまったとの声が見聞調査でも上がっている。これらを解決するため、住民の方々が娯楽として利用できるような公園、体育館やスポーツ施設や歩いて/自転車で気楽に行ける商用施設の開発を提案したい。これらの施設には屋上に富士山が見える綺麗な展望台を設置が必須にしたい。また、企業のCSRを北側開発地域の会社に検討していただくことも忘れないでほしい。例えば、避難所として屋上に登れる外階段を設置し、休みの日はそこから眺望できるような開放場所ができれば地域の方々の理解と我々



の作成したコースマップの活用が増えると思われる。また、駐車場は広く、障害物が少ない土地として、駐車スペース以外の活用を行っている地域がいくつかある。恩田原スポーツ広場に加えた新たなイベントの土地として活用することを提案したい。

2つ目は、ウォーキングなどのスポーツコースの発展である。昨年度の大谷・小鹿地区のウォーキングコースに加え、新たに今年度では2つのコースを作成し、計7つのコースが現在提案されている。このコースに関するリーフレットを地域住民の方々に様々な形で配布を行い、積極的な周知活動を実施してきた。しかし、実際に活用してくださる方は少ない現状にあり、周知で終わらず、実際に活用してくださる方々を増やすことが、今年度実施した見守り隊活動やWSS活動の拡大に繋がれるのではないかと考える。具体的な案として、各種いスポーツクラブの活動の場として価値を上げる整備やどこからでもアクセスできるバス路線や駅からのレンタル自転車設置場所の増設を検討する必要がある。このコースマップを基にした交通網の整備を行えば、文字通り、ウェルネスシティとなる。

## 6 地域からの評価

### ① WSS 参加者から

・非常に良かったと思う。あまり運動をしていないため、継続できればいいと思う。・先生、学生さんも親切で、楽しい時間となり、感謝です。・週一回でも身体が軽く動くのが楽になったと思います。・筋力を落とさず生活していけるよう頑張ります。・身体の状態を数値化してみることはあまり無かったので良い経験でした。継続することの重要さも理解できました。静大までの距離が遠いので、身近な学区でも開催して下さるといいと思いました。楽しい時間で体力のみでなく精神的にも刺激を受けて若返ったような思いをさせていただきました。・とても楽しかったです。ありがとうございました。

### ② スポーツを専門とする学生による簡易体力テスト診断およびニュースポーツ体験会から

・学生さんが明るくて楽しかったです！・想像以上に楽しかったです。・運動会に参加してほしい。・良かったです。・自治会のイベントに参加してもらいたい。・楽しい、もっと企画して!!・今日のような活動をもっと地域に広げて欲しい。・子供を持つ親は運動不足だと思うので、親子で参加できるイベントがあるといいです。・各自治会と連携してやってもらえるといいと思う。・楽しかったです。・地域交流のイベントは防災の意味でもとてもいい活動だと思います。勉強になりました。・とても楽しかったです。・すばらしい企画でこれからも実施して行きたい。・良い行事だった。

自治会の代表者から

**曲金六丁目自治会長（松下氏）：**初めは、「自治会って一体何のためにあるのか」と自問自答することもありましたが、富士見台二丁目の皆様から「目的はシンプルに、楽しく交流することだよ」と教えていただき、正直少々驚いた次第です。しかし、実際に活動に参加してみると、若い皆さんが先頭に立ち全力で楽しむ姿に触れ、そのエネルギーに自然と引き込まれました。また、冬まつりの当日は時間が経つにつれて地域の方々が次々と公園に集まり、共に盛り上がる様子を目の当たりにし、「これこそが地域の力である」と深く実感いたしました。

普段、大学生の皆さんと直接交流する機会は少ないため、今回の経験を通して、世代を超えたつながりの大切さを改めて感じることができました。皆さんと共に活動する中で、地域力は楽しく自然な交流から生まれるという答えを自分自身で見出すことができたと感じています。

これからも、静岡大学の皆さんが卒業や入学を経てメンバーが変わっても、富士見台二丁目自治会との温かい交流が続いていくことを心より願っております。地域に大学があるという大きな価値を、市民に伝えてくださり、その価値を実際に提供してくださる皆さんの活動に、改めて深く感謝申し上げます。

**富士見台二丁目 町内会長（飯田氏）：**皆さん、いつもボランティアとして町内会の活動に、ご協力いただきまして、誠にありがとうございます。皆様のおかげで本当に活気のある行事が展開できました。ご案内の通り、日本の地域共同体は戦前の農村型地域共同体から、終戦、高度経済成長時代を経て、さらに人口減少・少子化など様々な要素を包含する新しい時代の中で、大きく変化してきています。皆さんが接した「祭り」に集まった人々（住民）の気持ちも必ずしも一つではありません。実は、最近漸くマスコミ等でも大きなテーマとして町内会の在り方が取り上げられつつあります。明らかな退潮傾向は否めません。「変わらなければならない」日本の組織の一つとして町内会（自治会）組織があります。そのような中で、多くの富士見台2丁目の住民が皆さん静岡大学の皆さんの参加を心から喜んでるのはなぜでしょうか。もちろん、ストレートに感謝の気持ちがあります。これが第一です。一方で、新しい地域共同体の集いの在り方に対して、皆さんからヒントをいただいているからではないのかと思っています。地域の人々（地域住民）とくくりますが、一人一人はまず個人であり、地域だけに所属している時代ではありません、それは職住一致の遠い時代の話です。職場のコミュニティ、趣味のコミュニティ、大人も子供も単一のくくりで論じられない世の中です。だから、町内会（自治会）は変わろうとしているのです。その意味でいうと、若干おおげさですが、静大の皆さんをボランティアととらえているのは間違えかもしれませんね。学びが動機となって、近くにあるコミュニティに主体的に参加しているのだととらえたいのです。これからも、是非、参加していただきたい。先ほどヒントをいただいていると言いました。皆さんと接しているだけで活力をいただいています。夢をいただいています。本当にありがとうございます。いつまでもこの関係が続くように願っています。アドバイスです。日本の地域共同体の変遷と現在の町内会（自治会）の在り方の課題を勉強してみてください。とても興味深いと思います。行事に参加するだけでなく、お話を聞いてみるといいですね。

## 企業課題や産業ニーズに応える高度専門人材育成（リスキリング）講座の開発

静岡大学地域創造教育センター辻本研究室

教 員：講師 辻本侑生

参加学生：教育学研究科修士課程 竹下琴里

### 1 要約

本研究では、静岡市内で働く市民に資するリスキリング講座を開発することを目指し、文献調査や市内企業インタビュー調査を行い、その結果に基づいてモデルプログラムの開発・試行を行った。調査の結果、他者との協働等に係る社会情動的スキルへの関心やニーズが高く、特に市内企業ではコミュニケーション能力養成への課題意識が高いことが明らかになった。こうした結果を踏まえ、本研究では人類学の知見を踏まえて「コミュニケーション」を問い直す静岡市オリジナルのリスキリングプログラムを開発し、モデル実施したところ、参加者から高い評価を得た。

### 2 研究の目的

本研究は、将来の静岡市を見通したときに求められる高度専門人材の育成に向けた調査研究を行うことで、静岡市内で働く市民に資するリスキリング講座を開発することを目指して実施された。

### 3 研究の内容

本研究では、大きく（1）文献調査、（2）ヒアリング調査、（3）プログラムの開発・試行実施、の三つを実施した。これらを通して明らかになった成果については、研究協力者の許諾を別途得たうえで、2025年度中に学術論文として公表することを想定している。そのため、本報告書では、実施した調査研究の概要を以下に記載する。

#### （1）大学の知を活かした高度専門人材育成に関する先進事例調査

2024年7月～9月にかけて、文献を用いて、日本や海外におけるリスキリングの先行研究や先進事例に関する調査を行った。

文献を渉猟するなかで、特に興味深いと思われたのは、McKinsey Global Institute社が2024年5月に発表したレポート“A new future of work: The race to deploy AI and raise skills in Europe and beyond”<sup>1</sup>であった。同レポートでは、AIによる労働力代替が進む中で、2030年の欧州において重要性が高まることが見込まれるスキルをいくつか例示しており、一般にイメージされやすい高度なITスキルに加え、Social and emotional skill（社会・情動的スキル）の重要性が指摘されていた。本事例調査では、このレポートの内容について検討したうえで、（2）のインタビュー調査の設計に反映させた。

また、国内のリスキリング事例調査を行ったところ、近年、UXリサーチャーやデザイナーなどの高度専門人材において人類学的な知識・考え方を学ぶニーズが高まっていることが把握され、大阪大学や山梨県立大学で人類学者が参画したリスキリングプログラムが開発されていることが明らかになった。

---

<sup>1</sup> Eric Hazan, Anu Madgavkar, Michael Chui, Sven Smit, Dana Maor, Gurneet Singh Dandona, and Roland Huyghues-Despointes 2024 A new future of work: The race to deploy AI and raise skills in Europe and beyond  
(<https://www.mckinsey.com/mgi/our-research/a-new-future-of-work-the-race-to-deploy-ai-and-raise-skills-in-europe-and-beyond>)

## (2) 市内企業の人材育成ニーズを深掘するインタビュー調査

静岡市内に事業所を有する9社の企業の就業者20人に、市内企業の人材育成ニーズに関するインタビュー調査を行った。具体的には、2024年7月～8月にかけて調査設計を行い、2024年9月に主に機縁法を用いて調査対象先の抽出・依頼を行い、10月～12月にかけてインタビューの実査を行った。

インタビューは、①人事・人材育成等の責任者、②学び直しの対象層として想定する職員のそれぞれについて約45分程度、計90分程度行った。質問項目は以下のとおりである。

### 【インタビューの質問項目】

| ①人事・人材育成等の責任者                                                                                                                          | ②学び直しの対象層として想定する職員                                                                                                                     |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ・所属職員の学びの履歴／学卒者の割合／専攻分野の傾向                                                                                                             | ・学びの履歴／転職歴／入社後のキャリア／仕事の概要                                                                                                              |
| ・入社後のキャリアパスの概要／転職者比率／採用戦略                                                                                                              | ・現在の業務で必要とされる知識・スキル／その理由                                                                                                               |
| ・組織で取組む学び直し(社内・社外)／理由／効果と課題                                                                                                            | ・所有している資格、取りたい資格                                                                                                                       |
| ・取得を奨励している資格とそのための支援策                                                                                                                  | ・キャリア向上に必要と思う知識・スキル／その理由                                                                                                               |
| ・業界で急いで学び直しが必要な知識・スキル／その理由                                                                                                             | ・大学等で学びたい知識・スキル・分野／その理由                                                                                                                |
| ・中期経営計画や人材育成計画の中で、今後必要になると考えている知識・スキル／その理由                                                                                             |                                                                                                                                        |
| ・今後世界的に求められる知識・スキルとして挙げられている以下のキーワードリストのうち、関心のあるもの<br>「思考力(デザイン思考、システム思考)」 「創造性」<br>「社会・情動的スキル(目標達成、他者との協働、共感力・感情制御)」 ※文献調査(欧米圏含む)より抽出 | ・今後世界的に求められる知識・スキルとして挙げられている以下のキーワードリストのうち、関心のあるもの<br>「思考力(デザイン思考、システム思考)」 「創造性」<br>「社会・情動的スキル(目標達成、他者との協働、共感力・感情制御)」 ※文献調査(欧米圏含む)より抽出 |

インタビューを行った結果、業種や職務に直接必要な知識・スキルを学びたいというニーズも聞かれたものの、それよりも、広義のコミュニケーションに関するニーズが顕著に聞かれた。例えば、インタビューで聞かれたキーワードを挙げるならば、「先回りする能力」、「共感・他者との協働」、「コーチング」、「対話」といったキーワードである。インタビューの中では対顧客、対社内でのコミュニケーションにおいても、これまでの「暗黙の了解」(見て学べ)が必ずしも成立しなくなっていることへの課題意識が多く聞かれた。

また、上記質問項目のうち「文献調査(欧米圏含む)より抽出した、今後世界で重要になると指摘されている主要な知識・スキル等のキーワードリストのうち、関心のあるもの」では、前述のMcKinsey Global Institute社のレポートに基づき「2030年の欧州で重要となるスキル」をいくつか例示したところ、複数の経営者・人事担当者から「Social and emotional skill(社会・情動的スキル)」への関心が強く示された。

## (3) 高度専門人材育成プログラムのプロトタイプ開発・試行

以上の先進事例調査と市内企業ニーズ調査の結果を踏まえ、2024年12月～2025年1月にかけて、高度専門人材育成プログラムのプロトタイプ開発を行った。プログラム開発は、(1)の事例調査でも取り上げた先進事例に参画している、合同会社メッシュワークの水上優氏(人類学者)と協働し、実施した。

開発したプログラムの概要、および2025年1月28日に実施されたモデル実施の概要は、以下のとおりである。2時間30分のプログラムで、人類学的知見を基にした講義に加え、「観察」と「インタビュー」のペアワークを取り入れ、「コミュニケーション」についてアカデミックな知見を踏まえて問い直しつつ、ビジネスシーンで活用可能な高度な能力を身に着ける内容とした。

(参加者数、アンケート結果等は「6. 地域からの評価」に記載した)

## 【開発したプログラムの概要】

|        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 講座タイトル | 「顧客の「暗黙の了解」を発見する～人類学の視点から再考する、ビジネスに必要なコミュニケーションの態度や進め方～」                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 趣旨     | 相手にどうしたら満足してもらえるかのコツや、自分の気持ちを上手に「伝達」することに着目したセミナーは多く存在します。しかし、今回は情報伝達技術向上を目指すのではなく、コミュニケーションの成立に焦点を当てます。コミュニケーションの成立には言葉や発言そのものを理解するだけでは不十分で、言葉や人の周りにある文脈、顧客や業界の文化、「暗黙の了解」などを互いに知っている必要があります。たとえば、登山道においては登山客同士で挨拶することが「暗黙の了解」となっており、挨拶をせずに通り過ぎる人は不可解に思われ、歓迎されません。そのような「暗黙の了解」は登山道だけでなくビジネスや業務の中にも埋め込まれています。本セミナーでは暗黙の了解がどのように現れているのか、どんな態度で他人と接していると暗黙の了解が見えてくるのかを人類学的なアプローチによる講義とワークショップで実感していただきます。 |
| 目標     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションの成立には様々な文脈への理解が必要であることを理解する</li> <li>・顧客や関係者、上司や部下、年齢の離れた同僚が属する社会・集団における「暗黙の了解」を意図的に発見する視点を身につける</li> <li>・文脈に応じた効果的なコミュニケーションを成立させることが可能になる</li> </ul>                                                                                                                                                                                               |
| 講師     | 水上優<br>合同会社メッシュワーク共同創業者。人類学者。修士（人間・環境学、京都大学）。メッシュワークでは人類学的アプローチに関する研修・ワークショップの主催や、フィールドワークを伴うリサーチの実施や伴走を担当。人類学的視点を企業活動や芸術活動に取り入れるため、実践・研究・コラボレーションを進めている。大学院修了後、米国系IT企業である日本オラクルにて勤務。後にUXコンサルティング企業ビービットにてコンサルタント・特別研究員として、大手メーカー等のUX企画、リサーチに参画後、2022年にメッシュワークを創業。 <a href="https://meshwork.jp/">https://meshwork.jp/</a>                                                                             |
| 日時・会場  | 2025年1月28日（火）18:30～21:00<br>静岡市葵生涯学習センター(アイセル21)3階アトリエ                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 対象     | 静岡市内の企業等に勤務されている方                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 定員     | 10名程度                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 参加費    | 無料                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 主催     | 静岡大学地域創造教育センター辻本研究室・静岡市生涯学習推進課                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |

## 4 研究の成果

### (1) 当初の計画

- ① 大学の知を活かした高度専門人材育成に関する先進事例調査
  - ② 市内企業の人材育成ニーズを深掘するインタビュー調査
  - ③ ①・②の結果を踏まえた高度専門人材育成プログラムのプロトタイプ開発・試行
- ※①・②は並行して、2024年7月～11月にかけて実施する。③は2024年12月～2025年1月に試行実施し、2025年2月に研究結果全体を総括する。

### (2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

A（予定通り実施した）

### (3) 実績・成果と課題

これまで述べてきた通り、静岡市オリジナルのリスキリングプログラムを開発することができたことは大きな成果である。それだけではなく、自治体・大学の両方で喫緊の課題となっているリスキリングについて、市担当者と大学研究者が協働して市内企業へ連続してインタビューを行うことで、市・大学のそれぞれの担当者が、これまで得ることのできなかつたリアルな知見を入手することができ、市・大学それぞれの生涯学習施策の推進や、市・大学との協働体制の強化につながったと考えられ

る。これは共同研究の大きな副産物であったと指摘できよう。今後の課題としては、今回開発したプログラムを実装していくことや、そのための体制づくりが挙げられる。

#### (4) 今後の改善点や対策

今回は、大学側の担当研究者が着任してすぐであり、また市側の担当者も本事業（しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業）を活用するのは初めてであったため、研究開始当初より対面打ち合わせを比較的頻繁に行った。このことは結果的にプロジェクト進行上良い結果をもたらしたと考えている。

本事業は、自治体側の政策課題解決（短期間で完結する、施策につながる実務的な研究）と、大学側の学術研究（中長期的に実施する、学術論文の出版につながる研究）という二面性を有している。本事業の実施を通じて、自治体・大学研究室双方がwin-winとなるよう、綿密なコミュニケーションをとっていくことが引き続き重要であると考えられる。

### 5 地域への提言

本研究の成果を実装するためには、今回開発したリスキリングプログラムを継続的に実施できるように、予算面を含めた実施体制づくりが必要であると考えられる。

### 6 地域からの評価

2025年1月28日に実施したセミナーでは、静岡市内で働く10人の方（うち3人はインタビュー調査協力者）にご参加いただいた。参加者アンケートでは、回答者のすべてが「大変満足」または「満足」と回答し、83.3%がセミナーの内容が「業務に結び付く」との回答が得られ、人類学的な「観察」と「インタビュー」を取り入れたプログラムが、リスキリングプログラムとして有望であるとの評価が得られた。



2025年1月28日に実施したセミナーの様子

## 静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡大学 情報学部 永吉研究室

教 員：教授 永吉実武

参加学生：四方大輔、稲田朱里、楊芋帆、峯重奏斗、森峻馬

### 1 要約

川根高校の生徒（川根本町出身者、川根留学生の双方）が川根本町を題材としたテーマに主体的に取り組む、地域・地域産業への理解（新発見、深化、地域愛）を促進することは、卒業後の自らの活躍の道を探索するきっかけとなるだけでなく、社会で活躍するための実践知を学び取るチャンスでもある。また、このような地域の産・学・官が一体となったユニークな取り組みを行うことは、地域外への魅力発信にも有益であると考え。このような取り組みは、短期的な成果を追求することもさることながら、長期的視点に立脚した取り組みも求められるものである。

最近の高校教育の視点では、教科「情報」が必修化されただけでなく、その内容が将来社会で活躍するうえで必要とされる知識であることが広く認識されつつある。

このような認識のもと、本事業では、昨年度に引き続き静岡県立川根高校の生徒と静岡大学情報学部（大学院総合科学技術研究科情報学専攻）の学生とが共同で川根本町等で収集されたデータを統計手法を用いて分析し、発表を行った。これらの活動を通じて、川根本町の現状・魅力・今後の可能性を発見したり、理解を深めたりすることによって、地域への愛着心を向上させるとともに、高校生が将来キャリアを考えるきっかけづくりとした。

具体的には、川根高校における教科「情報Ⅰ」の授業において、①川根本町に関するアンケート等により収集した定量データを、②コンピュータソフトウェア等を用いたデータ分析と考察により知見等を導出し、③川根高校近隣住民（定住者および移住者）へのインタビューとフィールドワークにより収集した定性データを加味し、④当該授業を通じて地域住民等に対する発表会を実施した。さらに、本取り組みの成果を測定すべく川根高校生徒のシビックプライドの形成要因についても調査し、川根高校長等への報告を実施した。また、高校生向けの講義や討議も実施した。

### 2 研究の目的

令和6年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業の一環として、「静岡県立川根高校の魅力向上」に取り組む。具体的には、川根高校の教科『情報Ⅰ』の授業において、①静岡大学情報学部教授：永吉実武により模擬授業を行い、本研究の事業（プロジェクト）の目的を明確にする、②静岡県立川根高校の生徒と静岡大学情報学部（等）が共同で川根高校周辺地域のフィールドワークおよび地域住民（定住者および移住者）へのインタビューを実施し、地域に対する理解を深める、③当校の生徒と、静岡大学情報学部の学生が、川根本町の観光に関するアンケート調査を通じて収集された定量データの分析を行い、相互発表を行うだけでなく、これらを地域住民等に対しても発表を行う。さらに、④より発展的な領域として、静岡大学情報学部の学生により川根高校生のシビックプライドと定住意識に関する調査を行い、川根高校の将来カリキュラム設計に対するインプットとする、ことを目的とする。これを通じて、①高大連携の実現、②現下において注目されている「データサイエンス」教育の実践・深化、③生徒のキャリア教育の充実、④学生の「実践からの学び」の促進、⑤学習意欲の向上、⑥川根高校における特色のある教育プログラムの実現、を狙う。（図1参照）（次ページ）

### 3 研究の内容

研究内容1：インターネットアンケートを通じて収集された川根本町の観光に関するデータ、および川根高校周辺地域のフィールドワークとインタビューを通して収集された定性データを

分析し、川根本町の移住・定住促進施策を考案・提案する。

研究内容2：川根高校生徒のシビックプライド調査を実施し、定住意識との関係性を考察する。

#### 4 研究の成果

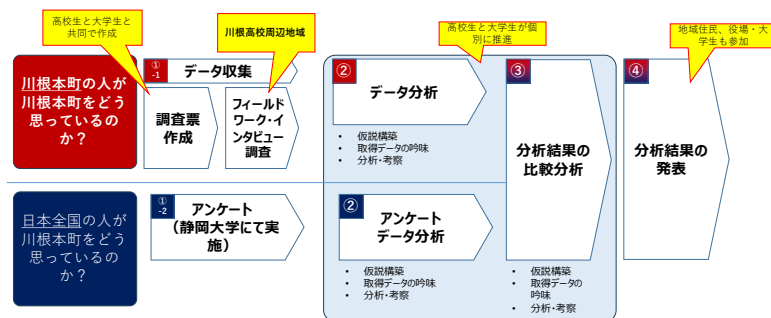
**研究内容1（川根本町に対する町外の人々のイメージや、町内の人々の意識を分析し、移住・定住したくなるような川根本町にするにはどうするか提言する）について**

##### (1)当初の計画

本取り組みに際し、事前に、静岡大学情報学部教員が川根高校の「情報I」の授業にてイントロダクション(導入)を実施する。

次に、①-1:生徒と学生が共同で川根本町および周辺地域に対する理解を深めるためにフィールドワークを実施する。①-2:インターネットアンケートにより川根本町の観光に関するデータを収集する(外部委託)。②生徒と学生が、(グループワーク等により、)個別にデータ分析作業を実施し、③分析結果の比較や考察を行い、④分析結果を高校生・生徒が相互に、また地域住民等に対して発表する。これらの一連の過程で、生徒と大学生が交流を図る。

その後、活動を振り返り、成果をまとめるとともに、次年度等の活動に対する示唆を得る。



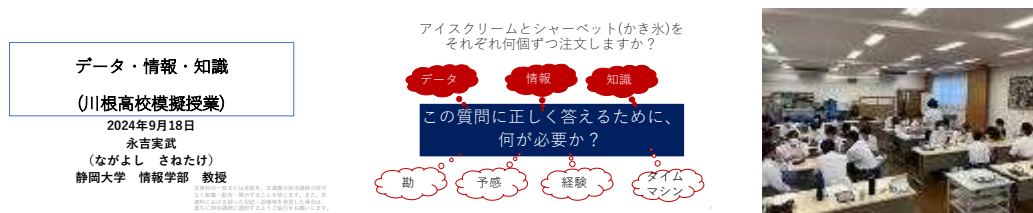
図：研究計画

(2)実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

##### ⑩. 静岡大学情報学部教員が川根高校の「情報I」の授業にてイントロダクション(導入)の実施(2024年9月18日) 【A：予定どおり】

2024年9月18日（水）13:20-15:10「情報I」の授業において、静岡大学情報学部教授:永吉実武が「データ・情報・知識」と題して講義を行い、データ分析の目的や意義などについて解説を行った。なお、イントロダクションは、「ふじのくに地域・大学コンソーシアムが実施する高大連携出張講座」と併せて実施することによって相乗効果を狙い、この内容を本研究事業の導入とした。

その後、本取り組みにおける実施内容の説明を行った後に、川根高校の生徒と静岡大学情報学部の学生が交流を実施した。また、この際に2024年10月28日のフィールドワーク際に実施するインタビューの質問票も作成した。



図：導入授業のスライドとその時の様子

##### ①-1.生徒と学生が共同で川根本町に対する理解を深めるためのフィールドワークの実施（2024年10月28日）【A：予定どおり】



川根高校の生徒と静岡大学情報学部等の学生が4グループに分かれて、川根高校周辺地域のフィールドワークを実施するとともに、地域住民（定住者および移住者）に対するインタビューを実施し、地域に対する理解を深めた。

フィールドワークを行った地域：徳山地区（川根高校周辺）の神社、商店、文化施設など  
インタビュー対象：定住者4名、移住者4名

#### ①-2.インターネットアンケートにより川根本町の観光に関するデータの収集(2024年8月23日～8月29日／2024年8月29日～30日) 【A：予定どおり】

株式会社アイブリッジのFreeasyを用いて、日本全国7ブロック、延べ2,807人（401人／ブロック×7ブロック）に対して川根本町に関する認知調査を実施した。また、川根本町に訪れたことがあると回答した150名に対して川根本町における観光体験の満足度等の追加調査を実施した。

#### ②. データ分析作業の実施、および ③. 分析結果の比較・考察(2024年10月29日～12月2日) 【A：予定どおり】

前項①-1、①-2で入手したインタビューデータやアンケートデータをMicrosoft Excelや統計解析用ソフトウェア等を用いて分析を行い、川根本町の観光の実態把握および問題・課題の抽出を実施した。さらに、川根高校生徒および静岡大学情報学部学生の発案により、移住や定住の促進案を考案した。

#### ④. 分析結果の発信（最終発表会（2024年12月2日）【A：予定どおり】

2024年12月4日（月）13:10～15:10「情報I」の授業において、川根高校生徒: 24名がポスター発表を実施し、静岡大学情報学部4年生学生が、データ分析および川根本町の移住促進策考案の成果を相互発表した。また、川根高校および静岡大学関係者以外に、地域住民や川根本町議会議員、川根本町役場職員、民間企業従業員等：20名程度も参加した。



図：発表会の大学生の発表スライド・写真



図：川根高校生徒のポスター発表

#### ⑥.活動を振り返りと成果とりまとめ(2025年2月14日)(場所:静岡大学浜松キャンパス)【A：予定どおり】

2024年度の活動を振り返り、実績評価を行うとともに、次年度に向けての改善ポイントや実施計画概要等について協議した。(参加者：川根高校「情報I」担当教諭：1名、静岡大学教員：1名、静岡大学学生：4名)

研究内容2(川根高校生徒のシビックプライド調査を実施し、定住意識との関係性を考察する)について

##### (1) 当初の計画

①川根本町におけるシビックプライドの源泉を抽出することを目的にアンケート調査を実施、②抽出された源泉に対する評価とシビックプライド、定住意識の関係性を明らかにすることを目的にアンケー



ト調査を実施、③収集された定量データを統計分析し、モデル化、④川根高校に報告する。

(2) 実際の内容 (Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など) とその理由

①のアンケート調査(1回)、②のアンケート(2回)を実施した。③収集された定量データの統計分析を通じて、川根高校生のシビックプライドの源泉・醸成要因・定住意識との関係性を明らかにした。

④川根高校校長等への分析結果の報告を実施した(2025年2月14日/オンライン)。【A: 予定どおり】

(3)実績・成果と課題(研究内容1および2をまとめて記載)

本取り組みには、静岡県立川根高等学校の生徒1年生24名「情報I」、および静岡大学情報学部等学生5名(大学院生を含む)、川根高校教諭7名(フィールドワーク協力者、授業実施協力者、を含む)、静岡大学教員1名が参加した。

昨年度に引き続く本取り組みを通じて、川根高校の生徒にはデータサイエンスを通じた社会問題の発見・解決の意義、などの一端に触れる機会になったと考える。特に、川根高校周辺地域のフィールドワークを通じて地域住民(定住者および移住者)にインタビューを実施することによって、より地域の問題に対する関心が深まったのではないかと考える。また、その結果として、発表会には多くの地域住民等が参加した。

少子化や人口減少等の影響による入学者定員の減少により川根高校の生徒数が減少しつつある一方で、地域の活力・魅力を維持・向上させていくためには、地域に高等学校が存続している意義は大きい。このためには、特色ある教育プログラムを実施することのより、生徒の地域への愛着心を醸成し、定住を促進させていく努力も必要である。このために、本研究を通じて川根高校生徒のシビックプライド醸成要因に関する示唆を川根高校に提供し、今後の教育プログラム検討のための材料とすることができたことは一定の成果であると考ええる。

(4)今後の改善点や対策(研究内容1および2をまとめて記載)

「データ分析」を主体とする取り組みは、本来はデータ分析の結果をきちんと考察することを通じて知見を導出し、対策を立案することが肝要であるが、データ分析を実施すること、もしくはデータ分析手法の習得が目的化する傾向があるが、本取り組みにおいては、統計手法を用いたデータ分析にとどまらず、フィールドワークやインタビューも実施することによって、定量データの分析結果が意味するものの解釈することができた。このため、これを継続する必要がある。またこの際に、川根高校生徒のシビックプライド醸成要因を加味することを考慮したい。

## 5 地域への提言

昨年・一昨年度の報告書においても同様のことを指摘したが、高校教育においては教科「情報」が必修化されただけでなく、その内容が将来社会で活躍するうえで必要とされる知識であることから、一連のデータ収集、統計手法を用いた分析、分析結果の解釈の流れを早いうちに身に付けておく必要がある。このために地域を題材にしたデータ分析に取り組み、川根本町の現状・魅力・今後の可能性を発見したり、理解を深めたりすることは重要な取り組みであると考ええる。本取り組みは、その重要性和意義に鑑み、単年度の事業とすることなく、長期間継続し、改善を積み重ねることを通じて、定着化する必要があると考える。

## 6 地域からの評価

高校生と大学生の交流を通じて教科「情報I」関連の実践的な活動を行うことは、高校生にとって関心とモチベーション向上の機会になる。また、静岡大学情報学部との連携によって「情報I」の内容を深くすることができたので、ぜひ、来年度も継続して実施したい旨のフィードバックを受けている。また、シビックプライドおよびそれと定住意識との関係性分析も参考にしながら、川根高校のカリキュラム作成を検討したい旨のコメントも得た。

## 外国人住民の住みやすさ向上に関する研究

(川根本町 経営戦略課 まちづくり推進室)

静岡大学 人文社会科学部 漢語使者ゼミ (研究室)

教員：教授 張盛開

参加学生：グエン ティ トゥ メン、何俊文、張睿思、謝佳瑶、遊天一、  
符睿、柴田南帆、Ngyuen Thu Trang、李金緯、Tran Xuan Hieu

### 1. 要約

川根本町で働いている外国人研修生の要望や問題を解決するために、フィールドワークを実施してきた。具体的には、外国人研修生を対象に、現状とニーズを調査した。調査結果に基づき、関連資料の多言語版の作成を行う。

### 2. 研究の目的

- ① 外国人研修生を対象に現状とニーズを調査し、問題点を明らかにする。
- ② 研修生と共に働く日本人を対象に外国人研修生に対する要望や外国人研修生へ行えるサポートを調査し、解決案を提案する。
- ③ 川根本町に在住する外国人が生活しやすくなるために、外国人向けの「暮らしのガイドブック」多言語版を作成する。

### 3. 研究の内容

川根本町の企業に在籍中の研修生や日本人を対象に二回インタビューを実施し、その現状や要望をヒアリングした。

多言語版資料（7言語：中国語、ベトナム語、英語、ミャンマー語、タイ語、インドネシア語、韓国語）を作成した。

### 4. 研究の成果

#### (1) 当初の計画

- 10月：日本在住外国人へのオンラインアンケート調査などを実施する。  
11月：インタビュー調査を実施する。調査結果の整理、分析と考察を行う。  
12月：現地を訪問して外国人住民の暮らしの実態を観察し、本調査を実施する。  
1月：調査結果を整理し、分析と提案を行う。  
2月：「暮らしのガイドブック」多言語版（中国語、ベトナム語、英語等）を作成する。  
3月：研究成果を報告会にて発表し、研究成果報告書提出する。

#### (2) 実際の内容

- 10月（B一部修正）：理由は「川根本町が実施する「外国住民へのアンケート」の内容の内容と重なるため、アンケート調査を実施せず、実地調査を実施。

1 回目のフィールドワーク (FW1) : 10 月 20 日に、川根本町寸又峽を訪問し、翠紅苑に在籍するからの研修生 (ネパールとミャンマーから) や日本人従業員を対象に、日本語やミャンマー語でインタビューを実施した。

11 月 (B 一部修正) : 理由は計画にあったフィールドワークが 10 月下旬に実施済みのため、11 月はその調査結果の整理、分析と考察に専念した。

10~11 月 (D 追加) : 川根本町が実施する「外国住民へのアンケート」の調査票を 7 言語 (中国語、ベトナム語、英語、ミャンマー語、タイ語、インドネシア語、韓国語)) に翻訳し、担当者へ提出した。追加の理由は日本語ができない外国人住民に日本語のアンケートを実施するよりも外国語 (母国語) の調査票で実施したほうが効率的だと考えたからである。

12 月 (B 一部修正) : FW1 で得られた情報を整理・分析し、報告会を開催した。

計画修正の理由 : 11 月の結果分析に時間を要したため、12 月の現地調査を中止。その代わりに 1 回目の現地調査に関する報告会 (12/19) を開催した。

1 月 (C 中止) : 理由は期末試験等で参加者全員が多忙なため、スケジュールの調整が厳しく、2 回目の現地訪問を 2 月中旬に実施することになった。それに伴い、1 月に予定していた「調査結果を整理し、分析と提案を行う」を 2 月末に遅らせた。

2 月 (B 一部修正) : 2 回目のフィールドワーク (FW2) として、12 日に川根本町にあるケーブルテクニカ (株) にて中国人研修生と日本人従業員を対象に日本語と中国語でインタビューを実施した。

12 月~2 月 (A 予定通り) : 「暮らしのガイドブック」関連資料の多言語版を作成した。

3 月 (A 予定通り) : 研究成果を報告会にて発表し、研究成果報告書提出した。

### (3) 実績・成果と課題

調査研究の成果として、研修生と共に働く日本人と外国人研修生の間にある言語や文化の壁を破ることができた (研修生が普段日本人上司に言えないことや表現できないことなどを、私たちを通して伝えられた) ことが大きいと言える。

二回のフィールドワークを通して、研修生のおかれている現状やその要望を収集できた。研修生からの要望としては以下のようなものがあった。問題点だけではなく、積極的な意見もたくさん聞いた。

- 勤務時間外に楽しめるものが少ない、買い物が不便なため、改善してほしい。
- 日本人ともっと交流したいけど、きっかけが少ないため作ってほしい。
- 日本語ができないため、自分の考えがうまく伝えられない。日本語をもっと学びたい。
- 初めはこんな山のところでホテルと立てることに本当に驚いたが、静かで自分もいい気持ちになるところで気に入った。周りを散歩するとストレスが解消できる
- ミャンマーと日本は比較的文化が似ているため、日本に来てからの生活にも馴染みやすい

- 最初は慣れないことも、徐々に慣れて、さらには人生を楽しむようになるまで、仕事しながら勉強して、自己成長しはじめた。将来もその日本で働きたい

一緒に働く日本人から外国人研修生やその受け入れに関する要望や現状を調査した結果、下記のようなことがわかった。調査を通じて、日本人が外国人研修生との触れ合いに困っている点だけでなく、楽しんでいる様子もうかがえた。

- 研修生らの日本語力が限られているため、冗談で言うつもりでも、相手に対してストレートになってしまう恐れがあり、日本語力を高めてほしい。
- 宗教の関係で食べられないものがあったら事前に教えてほしい。
- 日本の旅館の風習を事前に学習してきてほしい。
- 外国人研修生と仲良くしていきたい。
- ネパール人は料理を作ってくれるが、辛くて食べられない。
- 外国人研修生の母語（例えば、ネパール語）は難しいが、英語ぐらいをもっと勉強して交流したい。
- 外国人と毎日一緒に働いているため、日本人と外国人の距離が近くなっている。いろんな国からの研修生を受け入れてほしい。

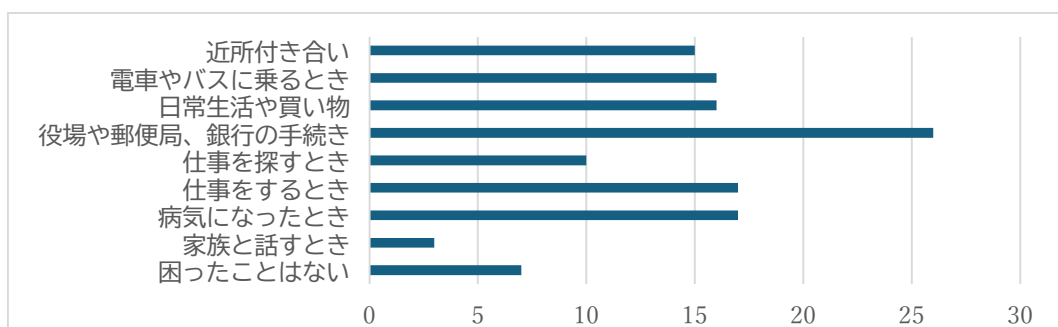
留学生のみんなで力を合わせて作成した多言語資料は、大いに活躍した。我々の作成した中国語、ベトナム語、英語、ミャンマー語、タイ語、インドネシア語、韓国語の7言語のアンケート調査票で川根本町がアンケート調査を行った結果、回収率が極めて高かった。以下に川根本町経営戦略課まちづくり推進室より提供していただいたアンケート調査のデータ（関連内容）を示す。

◆アンケート回答者数 43 人（回答率：42.5%）

オンライン：33 名（中国語 13、英語 7、ベトナム語 4、日本語 4、インドネシア語 4、韓国語 1）

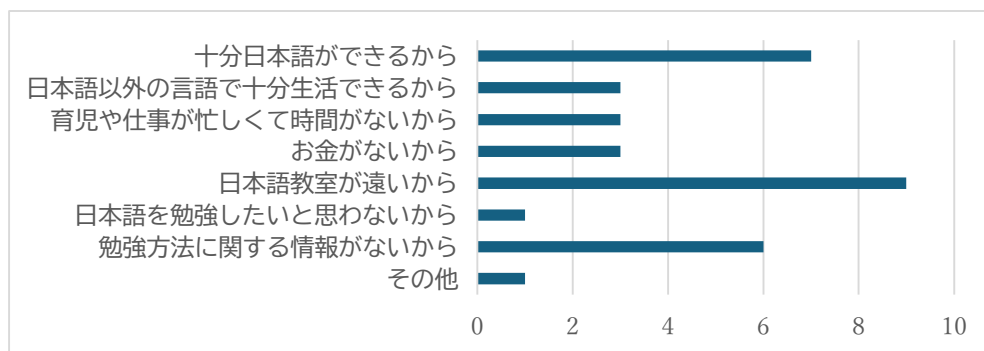
Q12 今までに、日本語ができないことが理由で困ったことはありますか。

※複数回答可



Q15 日本語を勉強していない理由は何ですか。

※複数回答可



Q16 川根本町で日本語を勉強できる機会があれば参加したいですか。 ※ひとつ選択

| 選択肢       | 回答数 | 割合   |
|-----------|-----|------|
| 1 参加したい   | 32  | 74%  |
| 2 参加したくない | 11  | 26%  |
| 合計        | 43  | 100% |

Q19 【参加したくない人】

参加したくない、参加する必要がある理由を教えてください。 ※複数回答可

| 選択肢                  | 回答数 |
|----------------------|-----|
| 1 十分日本語ができるから        | 2   |
| 2 日本語以外の言語で十分生活できるから | 1   |
| 3 育児や仕事が忙しくて時間がないから  | 9   |
| 4 お金がないから            | 1   |
| 5 家が遠く通えないから         | 2   |
| 6 その他                | 2   |

7 言語版「暮らしのガイドブック」関連資料（お風呂の入り方、医療（大人、子供）等）を作成できた。今後これらの資料で川根本町で働いている外国人の暮らし改善に役立つことが期待できる。

外国住民へのアンケート調査は日本全国で実施しているもので、本プロジェクトで作成した 7 言語版の調査票をそのまま全国の市町村で使用すれば、日本で暮らすいろいろな国からの外国住民への調査が可能になる。「暮らしのガイドブック」関連資料の多言語版も外国住民や来日する観光客への事前学習資料にも使用できるため、日本を外国人にやさしい国としてのイメージアップに貢献できる。外国人研修生や日本人への調査結果は、外国人研修生の働く環境や暮らし向上につながる。

以上のような大学等の研究の成果の還元を図り、川根本町の事例での調査結果やその提案、対策、作成した多言語資料などをもって、都市圏の発展に寄与するものも大きいと考えられる。

#### (4) 今後の改善点や対策

調査期間が短く、準備、実施、考察と分析が十分にできなかったことが課題として挙げられる。次年度以降は早めに計画し、実行したいと考えている。フィールドワークに関しては、事前準備（機材の設置、質問票の検閲）がきちんとできなかった。そのため、メンバーのスケジュールを事前に把握することと、フィールドワークを行う前に機材の設置を学ぶことは対策として考えられる。

#### 5. 地域への提言

アンケートとインタビューを通して、研修生の日本語力の向上はまず重要だということが判明したので、研修生の日本語力の改善案として、町や企業内で日本語の教育を実施することや、研修生と共に働く日本人が外国語の基礎を学び、「やさしい日本語」を使いこなすことが挙げられる。

次に、外国人と日本人との交流がまだ少ないことがあげられる。そのためには勤務時間外で外国人と日本人が一緒に参加できるイベントを積極的に行うことが必要である。

そのほかに、「やさしい日本語」を一般住民に普及する必要があると感じている。更に、バスの本数を増し、多言語版のバス時刻表を作成することで、川根本町にいる外国人や住民が暮らしやすくなるのではないかと考えられる。

#### 6. 地域からの評価

調査結果の整理やまとめは3月に予定しており、地域への報告もその後になるため、ここではフィールドワーク実施時のコメントなどを示すことにとどまる。二回のフィールドワークとも、同じ国からの留学生と母国語を話すことができたので、言葉の壁がなくなったことで、ほとんどの研修生がリラックスできたように見受けられた。

企業の方からのコメントは下記のようなものがあつた。

- ✧ 母国語を話している研修生たちは生き生きしている。
- ✧ 留学生たちの力を借りて研修生らの考えていることや好みがわかってよかった。
- ✧ 私たちも手探り状態なので、報告書が出来上がったら拝見させて頂き、今後の外国人実習生の対応に生かしていきたい。

#### ◆ 資料1：インタビューの様子

FW1 ミャンマーからの研修生



ネパールからの研修生



日本人従業員



FW2 中国からの研修生



日本人従業員



◆ 資料 2：多言語版資料（一部）

- 番号 日本語 ベトナム語 タイ語 インドネシア語 ミャンマー語 韓国語
- 1 重大な病気やけがの可能性あります！ Có khả năng mắc bệnh nghiêm trọng hoặc bị thương !  
 อาจมีความเสี่ยงจากโรคร้ายหรือการบาดเจ็บที่รุนแรง! Kemungkinan Mengalami Penyakit atau Cedera Serious! ငြင်းထန်သောဘေးနာခြင်းဆိုမဟုတ် ထိခိုက်ဒဏ်ရာရခြင်းဖြစ်နိုင်ပါသည်။ 중대한 질병이나 부상의 가능성이 있습니다!
- 3-2 顔半分が動きにくい、または、しびれる Một bên mặt khó cử động hoặc bị tê.  
 ใบหน้าครึ่งหนึ่งขยับได้ยากหรือรู้สึกชา Sebagian wajah sulit digerakkan atau terasa kebas.  
 မျက်နှာတစ်ခြမ်းလှုပ်မရနှုတ် ကျဉ်းနည်းသည် 얼굴 한 쪽이 잘 움직이지 않거나, 감각이 이상하다.
- 3-3 ニッコリ笑うと口や顔の片方がゆがむ Khi cười nhợt, miệng hoặc một bên mặt bị méo.  
 เมื่อยิ้มแล้วปากหรือใบหน้าฝั่งหนึ่งบิดเบี้ยว Saat tersenyum, salah satu sisi mulut atau wajah tampak tidak simetris. သင်ပြုံးလို့လဲ ကံအင်္ကျီ သင်ဦးစပ် ဒါမှ မဟုတ် မျက်နှာတစ်ဖက်ကပုံ ပျက်နေသည်  
 웃을 때 한 쪽 입이나 얼굴이 일그러진다
- 3-4 ろれつがまわりにくく、うまく話せない Khó phát âm và không thể nói chuyện một cách rõ ràng.  
 พูดไม่ชัดหรือพูดได้ยาก Sulit berbicara dengan jelas atau cadel secara tiba-tiba.  
 စကားများလို့ ဝေးထွေးနားလည်ကောင်းကောင်းမပြောနိုင် ဝိ 말이 잘 나오지 않거나, 단어가 머리에서 맴돌고 입으로 나오지 않는다
- 3-5 見える範囲が狭くなる Phạm vi nhìn thấy bị thu hẹp. การมองเห็นแคบลง  
 Lapangan pandang menjadi lebih sempit. အမြင်များမှု နှိုးလာသည် 보이는  
 시야가 좁아지거나, 잘 안 보인다
- 3-6 突然、周りが二重に見える Đột nhiên, cảnh vật xung quanh bị mờ và có hiện tượng chồng chéo.  
 จู่ๆก็เห็นภาพซ้อนรอบตัว Tiba-tiba melihat segala sesuatu menjadi ganda. ရုတ်တရတ် ပါဝင်ဝန်းကျင် အရာများ နှစ်ထပ်မြင်ရသလို ဖြစ်သည် 갑자기 하나의 물체가 두 개로 보인다
- 3-7 顔色が明らかに悪い Sắc mặt trở nên xấu đi thấy rõ. สีหน้าดูแย่มากผิดปกติ Warna wajah terlihat sangat pucat atau tidak sehat. မျက်နှာ အေးရာင်သိသိသာသာ ဖြူစေတာသည်  
 안색이 뚜렷하게 안 좋다
- 4-2 突然のしびれ Đột nhiên có cảm giác tê. ชาับพอสัน Tiba-tiba merasa kebas.  
 ရုတ်တရတ် ထုံကျဉ်းခြင်း 갑자기 저리거나 무감각함

## 就活生に興味を持ってもらうための情報提供

静岡県立大学 経営情報学部 上原ゼミ

教 員：准教授 上原 克仁

参加学生：水野 新菜、高橋 明日佳、三井 くるみ

徳山 つむぎ、佐々木 海人、今村 準、高須 和

浅田 拓真、石黒 亜弥、小澤 由佳、渡邊 あみ

櫻井 莉子、佐々木 陸、佐野 菜々穂、松井 智生

### 1 要 約

牧之原市内の企業の存在を知ってもらい、魅力を伝え、就職を希望する若者を増やすため、牧之原市内の企業を訪問、訪問した22社の学生が知りたい情報を記載し、学生目線で企業の魅力を紹介する冊子『Company Interview』を作成した。加えて、冊子を手に取ったものしかわからない冊子の内容を牧之原市のWebページに掲載した。掲載しただけでは見てくれる若者の目にとまらないので、試みに、若者がよく利用するSNS、Instagramに広告を出して周知を図った。

### 2 研究の目的

静岡県内の高校を卒業し大学に進学する者が53%（16,998人）、そのうち、県外の大学に進学する者が12,122人（72%）、さらに、就職のために県内に戻ってくるUターン就職率は33%と（数字は2024年大学卒業者の実数値、推計値）、県外に若者が流出し、県内企業では若手の人材不足が深刻な状態にある。

牧之原市では、従来から、Uターン就職希望者のために、市内企業に興味を持ってもらえるよう仕事と環境の魅力を発信しているが、その情報が、学生が欲しい情報とマッチしているのか不安である。学生の協力を得、学生に有益な情報を提供し、牧之原市内のUターン就職者を増やすことが本研究の目的である。

### 3 研究の内容

令和元年度に県が実施した「若年層の県外転出者に対する意識調査」によれば、就職時に出身地に戻らなかった理由で多かった回答は、「やってみたい仕事や勤め先がなかった」（41.6%）、「給与水準が高い仕事なかった」（27.2%）などである。本当だろうか。学生は企業のことを十分に調べず、知らないだけではないだろうか。このことから、学生が牧之原市の企業を訪問、企業見学をさせて頂くとともに、経営者やそこで働く若手社員にインタビュー調査を行い、実態を明らかにする。そして、得られた情報をもとにXやInstagramで企業の魅力を情報発信するとともに、学生目線で学生が知りたい情報を満載にした冊子を作成、高校生や大学生に配布して、牧之原市内の企業への就職希望者を増やす。

### 4 研究の成果

#### (1) 当初の計画

牧之原市内の企業に就職を希望する学生を増やす。そのため、市内の企業を訪問し、インタビュー調査を行う。XやInstagramなどSNS配信を行うほか、SNSより冊子の方が見返しやすいか保存しやすいといったメリットを考え、企業紹介の冊子を作成し、企業の魅力を発信する。



## (2) 実際の内容 (A) 当初の計画を実施できた。

7月： 牧之原市訪問。企業研究会（合同企業説明会）に参加。  
企業訪問実施に向け、訪問先企業に電話やメールで  
訪問日時の日時調整。

7月～11月： 牧之原市内企業22社を訪問。

XやInstagramといったSNSで、訪問先企業の情報発信。

12月～1月： 冊子やWebページの作成

2月6日： 牧之原市長へ冊子の贈呈式（成果報告会）開催。

2月： Instagram広告配信に向けた準備。広告配信。



7月31日 企業研究会の様子



インタビューの様子



投稿したInstagram の一例



企業見学の様子



2月6日 市長へ冊子の贈呈

## (3) 実績・成果と課題

### 訪問先企業（22社）

- ・有限会社光屋
- ・増田工業株式会社
- ・富士山静岡空港株式会社
- ・TOA株式会社
- ・島田掛川信用金庫
- ・東洋製罐株式会社静岡工場
- ・株式会社荒畑園
- ・日本郵便株式会社
- ・ミクニパーテック株式会社
- ・スズキ株式会社
- ・サンコー精産株式会社
- ・社会福祉法人花草会うたしあ
- ・株式会社マルイチ
- ・水野建設工業株式会社
- ・株式会社タキ倉庫 相良営業所
- ・株式会社小栗農園
- ・ハイナン農業協同組合
- ・社会福祉法人牧ノ原やまばと学園
- ・株式会社大日商会
- ・株式会社榛南自動車学校
- ・富士テクノロジー株式会社 牧之原工場
- ・矢崎部品株式会社 ものづくりセンター

### 冊子を作るうえで注意した点

- ① 県立大学の学生が伝わるよう工夫する
- ② 学生の知りたい情報や仕事の詳細を記載  
企業の仕事についてイメージしやすい  
(他の情報誌：仕事の概要のみ記載でわかりにくい)。
- ③ 取材させて頂いた方の写真を載せる  
どのような方が働いているのかイメージしやすい。  
親近感も出る。
- ④ 取材させて頂いた方が働いてみて大変だったことも記載



会社のいい点だけではなくて、実際に働いてみて大変だったことを載せ、ギャップを解消

⑤ 訪問した感想も載せる

同世代の感想を知ること、企業の雰囲気が理解できる。



## 企業訪問を通じてわかった、牧之原市内の企業の特徴

- ① 担当者の方々が親しみやすい雰囲気
- ② コミュニケーションのしやすさが魅力の企業が多い
- ③ 地元（牧之原）が大好き
- ④ 福利厚生を改善している企業が多い（特に製造業）
- ⑤ 大企業の工場が多い（牧之原は昼夜間人口県内1位）
- ⑥ 自分の仕事や自社の製品・サービスに誇りをもっている

## この冊子で期待できる効果

- ① 若者の地元就職促進（県外流失減少）  
学生視点の冊子により、学生に魅力が伝わりやすくなる。
- ② 学生の企業理解促進  
学生が実際に働くうえでのギャップや仕事内容の詳細など、他の媒体では知ることができない内容をインタビューして作成した冊子を通して、学生の企業理解を促進することができる。
- ③ 企業の知名度向上  
企業を知らない多くの若者に、企業のことを認知してもらえるきっかけになる。

## さらなる取り組み

冊子を1000部作成したが、これでは冊子を手にした1000人にしか伝わらない。冊子を手に取らない人にも訪問した企業の魅力を知ってもらうため、牧之原市役所商工企業課のホームページに冊子のPDFファイルを添付してもらい、ホームページを閲覧した人は誰でも閲覧できるようにした。

加えて、ホームページに行かないと企業の情報を見ることができない。そういう情報が存在することを周知するために、試みに、若者が良く利用するSNS、Instagramに広告を出した。その結果、6日間で、約10,000件のリーチ（広告閲覧したアカウント数）、264件のウェブサイトへのアクセス数、24件のいいね、3件のフォロー数など、一定の効果が見られた。

【地元企業の魅力発信！】静岡県立大学に  
企業紹介冊子を作成いただきました



牧之原市ホームページ



Instagram 広告

| 広告           | 1     | 2                                                             |
|--------------|-------|---------------------------------------------------------------|
| リーチ          | 5,116 | 4,763                                                         |
| ウェブサイトへのアクセス | 154   | 110                                                           |
| インプレッション     | 6,889 | 6,978                                                         |
| いいね！         | 15    | 9                                                             |
| 保存数          | 1     | 2                                                             |
| プロフィールへのアクセス | 53    | 24                                                            |
| フォロー         | 2     | 1                                                             |
| 外部リンクのタップ数   | 1     | 1                                                             |
| 期間           | 6日間   | 6日間                                                           |
| オーディエンス      | 年齢    | 18-25歳                                                        |
|              | 地域    | 牧之原市, 静岡市, 浜松市, 藤枝市, 富士市, 焼津市, 島田市, 御前崎市, 菊川市, 吉田町, 東京都, 名古屋市 |
| 広告を見た人       | 性別    | 男性                                                            |
|              | 性別    | 女性                                                            |
|              | 場所    | 静岡県                                                           |
|              | 場所    | 東京都                                                           |

Instagram 広告の効果（6日間）

## 5 地域への提言

- ① 多くの若者、とくに、大学進学を機に県外に転出した者にもっと見てもらえるよう、Instagram 広告のアプローチ方法を見直す。
- ② 牧之原市内の企業の特徴や魅力をアピールする機会を増やす。  
セミナーや説明会の周知方法を見直し、参加者の増加を図る。
- ③ 地元への愛着を醸成するための施策を考え実施する。

## 6 地域からの評価

大学生視点での冊子が作成されたことにより、牧之原市内の企業の魅力を大学生等へ発信できるよい機会となった。会社側も大変期待を持っており、今回掲載された22社以外からも問合せがあり、今後その拡大を検討してもらいたい。

今年度は、冊子を作成することを主となったが、今後Instagram等のSNSマーケティング等の手法により、より多くのターゲット層に届くよう、引き続き協業をお願いしたい。

## 静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡県立大学 薬学部 分子病態学分野

教 員：刀坂泰史

参加学生：須藤優（薬学研究院修士1年生）、

村松祐佳（薬学部4年生）

（以下本文）

### 1. 要約

川根高校では学生数の減少を改善するため「川根留学生」制度を立ち上げ、県内および県外から川根留学生を募集している。そこで多くの生徒から選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校存続による川根地域の活性化を目指している。そこで川根地域・川根高校より大学との連携の企画提案と実施について提案をいただき、協力のもと本プロジェクトを実施した。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

川根高校理科教諭との打ち合わせを経て、高校生物の時間で単元学習の範囲を超えた実習を実施した。具体的には血圧変化のメカニズムを学ぶ実習と、PCR実習の2つである。薬学部および大学院生の学生2名と協力し、講義から実習を実施した。高校生には少し難しい内容を含んでいたが、実施後に行った川根高校教諭との会議では、高校生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。

- ・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
- ・進路選択（進学、学部選択）に有意義である
- ・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
- ・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

以上の内容より、川根高校生徒にとって有意義な実験実習授業であり、本プロジェクトの目的を達成できたと考える。最終的な目標である高校のブランド化については短期的には難しく、卒業生の進路や本プロジェクトを継続することで長期的な視野で考える必要があり、継続的な実施が望ましいと考える。

### 2. 研究の目的

学生数の減少により、高校存続が危惧される状況を鑑み、平成 26 年度から「川根留学生」制度を立ち上げ、県内全域を対象に生徒事集を開始した。平成30年度からは募集対象を県外にも拡大し、約半数が川根留学生になった。これまで以上に留学生または川根地域（高校連携中学3校）の生徒からも選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校存続による川根地域の活性化を目指す。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

### 3. 研究の内容

川根高等学校の魅力向上・ブランド化を目的として、高校生を対象とした授業連携・実験実習を行う。薬学に関する実習を行うことで、学習内容のより深い理解、大学研究への理解と進学意欲向上、また薬学・医学領域への興味を持ってもらうことで学生の進路決定に重要な機会となると考える。静岡県立大学との密な連携をとっていることは県内大学への進学を目指す高校生にとってアピールにもなり、魅力向上につながると期待する。

具体的提案としては、「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業」である。当教室は医学薬学生物学を中心に研究、さらに大学教育を担当しているため、高校生が学習した内容を中心に応用発展的な課題について取り組む。さらに以降、継続的に授業連携を実施することで定着化、ブランド化につながると考える。"

### 4. 研究の成果

#### (1) 当初の計画

血圧とは、心臓のポンプ作用によって全身に血液が送り出されるとき、血管の内壁にかかる圧力のことで、心臓が収縮したときの血圧を最高血圧（収縮期血圧）、心臓が拡張したときの血圧を最低血圧（拡張期血圧）という。高血圧を発症すると脳卒中、心筋梗塞、心不全、慢性腎臓病といった疾患の発症リスクが増大するため、定期的に血圧をモニタリングすることは大切である。

血圧は疾患以外にも運動、温度変化、体位変換、深呼吸といった要因により生理的に変化する。本実習では血圧測定法の体得と合わせて、生理的な要因で変化する血圧の測定及び、血圧変動の作用機序を考察する。

コロナウイルス感染症などの感染症が流行したこともあり、PCR検査の意義や基礎的理解の必要性が高まっている。生物学的実験にも必須の技術である。高校生物でも原理について学習するがより理解を深めるため実習を行い、その理解を深めると同時に遺伝学を含む生命科学研究に興味を持ってもらう。

#### (2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

A：予定通り実施した。

#### (3) 実績・成果と課題

高校2年生8名の特進クラスを対象に1コマ（50分）の講義と実習を行った（写真参照）。川根高校理科（生物学）教諭との打ち合わせを経て、高校生物基礎の時間の1コマを高校生物の範囲を超えた実習を実施した。具体的には運動前後で血圧を測定し、実際に血圧が変化することを体験し、神経系による血圧変化のメカニズムを学ぶ実習である。また高校3年生4名のクラスを対象に1コマ（50分）のPCRに関する講義と実習を行った（写真参照）。薬学部の学生2名と協力し、講義から実習を



実施した。高校生には少し難しい内容を含んだが、実施後に川根高校教諭との話より学生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。

- ・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
- ・進路選択（進学、学部選択）に有意義である
- ・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
- ・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

#### (4)今後の改善点や対策

実習実施後、高校教諭、川根本町、大学の3者にて改善点と対策について協議した。実施内容・講義については大きな問題はなく、高校生の満足度も高く、継続して実施することで長期的目的が達成できると考えられる。継続して実習を実施できているため、より充実した内容となっていると協議会での結論となった。さらに大学生が実験などでメンター的な役割に関わり、コミュニケーションをとる時間を取ることができ、県内大学および医療系学部への興味関心の向上が期待できる。継続実施によりさらにブラッシュアップすることができると考える。

#### 5. 地域への提言

「川根留学生」制度は一定の成果を挙げており、地域活性化において大変素晴らしいプロジェクトであると考えます。静岡県立大学は地域貢献を重要事案として進めており、静岡県内市町村や企業の魅力化向上のために貢献している。高校の魅力は多様であり、またこれまでの歴史があるため新たなブランド化は短期間では困難であると考えます。今回のような大学との連携プロジェクトを継続することで、高校生の進路選択（特に県内進学希望、医療系学部志望者の増加）に寄与し、次に続く学生の高校選択に影響を与えることができると考える。またこのように高校が魅力的になることで地域そのものの魅力向上、地域医療の充実、など川根地域の活性化につながると期待する。

#### 6. 地域からの評価

昨年度の課題や反省を踏まえ、オンラインでの高校教諭・大学間での打合せなどを早い段階で重ねたことで、高校・大学ともに効果的な授業の実施ができた。

高校教諭からは、「普段の教科授業の発展的な学習を、大学教員や大学生に丁寧に指導して頂き、生徒は意欲的に実習することができた。高校での学習内容の理解も深まり、高校での学びの重要性にも改めて気づくことができた。」等の声をいただいた。

次年度以降も継続的な実施に加え、より専門性の高い教科においても大学との連携を深め、発展的な学習の機会を作りたいという意向を受けた。



導入講義



PCR実習の説明



大学生による  
血圧測定指導



血圧測定実習の様子



大学生との交流会



PCR実習の様子

## 認知症の正しい理解の促進に寄与する啓発ツールの開発

静岡県立大学 経営情報学部 教授 東野定律

経営情報学部 3年 勝又美智

### 1. 要約

厚生労働省が2022年から2023年にかけて行った調査によると、2022年の認知症高齢者数は443.2万人、MCIの高齢者数は558.5万人と推計され、性年齢階級別有病率が今後も一定と仮定した場合、2040年の認知症高齢者数は584.2万人、MCI高齢者数は612.8万人と推計されている。このような状況がある中、今や「誰もが認知症になり得る」という認識のもと、認知症になっても生きがいや希望を持って暮らすことができるような街づくりが各自治体において実施されているところである。

静岡市においても、認知症の方やその家族への総合的な支援を行う一環として、静岡市認知症ケア推進センター「かけこまち七間町」を葵区七間町に設置し、認知症に関わるイベント、健康チェック、VRでの認知症体験等様々な形で市民への認知症に関する知識の普及・啓発活動を行ってきている。

認知症の症状は自覚するのが難しく、その周囲の人々が気づくことで発覚することも多々あり、早期の治療とその介入を行うには、こうした周囲の人々の認知症への認識を深めていくことが重要である。また、認知症である本人はもとより、支援を行っているその家族は適切な医療と介護を行うための情報を常に求めているが、自ら情報を得ていくには専門機関等への問い合わせを行う必要があるなどといったような障壁があり、ましてや当事者とかかわりが薄い若い世代や周辺の住民などは、日常からそのような情報に触れることは少ない。

本研究は、地域住民を対象に、認知症についてその関心や、認知症に関連する情報の入手状況に関する調査を行い、その結果を基に構築したWebサイトについて、普及啓発の面における効果を計測してきた。静岡県立大学大学院経営情報イノベーション研究科において昨年度から「認知症の情報を発信するツール」の開発を試みており、中高年齢層を対象に、認知症への関心の創出を主眼としたWebサイトを構築し、今後のWebサイトを用いた認知症に関する情報提供に際して、より望まれる情報や提供方法についても把握を行ってきた。本年度は、利用者目線にたったより活用が推進されるツールを作成することを目指し、「見やすさ」、「安全性」、「個人に適した内容」、そして「自己理解」を反映したWEBサイトの構築を試みた。なお、社会実装にかかる調査に関しては、静岡市認知症ケア推進センター「かけこまち七間町」をフィールドとし、学生たちによる意見収集などを行った。

研究の結果、構築したWebサイトについて、認知症への関心が創出され、今後継続して情報収集を行う意欲に働きかけることができるツールであると確認することができた。また、中高年齢層だけでなく若年層でも構築したWebサイトやクイズを通じ、認知症への関心が生まれ、継続的に利用される意向を確認することができた。

静岡市における認知症支援については、既存の広報活動に加えて情報通信手段の活用や、他の事業と連携した情報発信が求められるだろう。また認知症の正しい知識に加えて、認知症当事者やその支援者の情報支援、さらに認知症に未だ関心が薄い人々への情報の普及が必要だと考えられるが、このツールを利用することによって、そうした人々が関心を持つきっかけとなることが期待される。

情報の発信方法は日々進化しつつあり、多岐にわたっているが、静岡市の認知症支援をより充実させていくためには、認知症について学ぶ機会を引き続き創出するとともに、既存の活動と協働した普及啓発や生活支援を行う取組の紹介が必要だということが予想される。



## 2. 研究の目的

本研究では、昨年度静岡県立大学大学院経営情報イノベーション研究科修士課程石井利奈氏が作成した認知症に関するWebサイトの内容を発展させ、より認知症についての知識や、関連する情報、普及啓発を促すための認知症への関心の創出を主眼とした新たなWebサイトを構築し、その効果検証を行うことを目的とした。

## 3. 研究の内容

静岡市において認知症予防を展開していく中で、いかに認知症に関する知識を広めていくべきか、より身近で日常的に認知症に関する知識を周知していくべきか、世代を超えてより多くの市民に情報を提供するにはどのような内容を提供すべきか、認知症の理解をすすめるツールとして、どのような内容を組み込むべきか等、具体的な検討を行うために、本年度は以下の2点の内容を展開した。

### (1) 認知症の正しい理解の促進に寄与するWebサイトの構築

昨年度構築したWebサイトのフレームワークを基に、本年度は認知症の基礎知識を自ら習得するような行動をより促すために、認知症に関する基礎知識をはじめとするWebコンテンツを作成した。また、継続的に学習するために、そのコンテンツの内容を理解することができるようクイズ形式による学習機能を付加した。前年に実施した調査から得られた結果より、認知症に関して地域住民の方々がより深く知りたいと考える項目として得られた内容とも合致している点も踏まえ、内容としては、静岡市が発行している「みんなの認知症予防2024年度版」を参考に、「認知症に関する基礎知識」、「認知症の方との接し方」、そして「認知症の予防」の3つを軸にコンテンツを展開した。

### (2) 静岡市認知症ケア推進センター「かけこまち七間町」等におけるアンケート調査

静岡市認知症ケア推進センター「かけこまち七間町」で展開されているイベントに参加した方や静岡県立大学の学生、およびその周辺地域住民に対し、実際に構築したWebサイトの内容を見ていただき、アンケート調査を実施した。アンケートでは認知症についての情報を日常的にどのような経路で入手しているか、認知症の方にとってWEBサイトが必要か、構築したWebサイトを利用することで、ご自身の認知症への関心は高まるか等の意見を収集し、認知症の情報収集と理解促進の機能を果たすことができるのか、基礎資料を収集することができた。

## 4. 研究の成果

### (1) 当初の計画

当初の計画では、利用者目線にたったより活用が推進されるツールを作成することを予定しており、「見やすさ」、「安全性」、「個人に適した内容」、そして「自己理解」を反映したWEBサイトの構築を試みた。また、開発を行ったWebサイトを用いた認知症に関する情報提供に際して、利用者の普段の情報入手媒体を踏まえたうえでより望まれる情報や提供方法と知識向上の意欲などを把握し、開発を行ったWebサイトについての検証を行うという計画であった。

### (2) 実際の内容とその理由 (A：予定どおり)

認知症という一般的に理解が難しい内容について、クイズ形式で認知症の知識を積み重ねることで、関心の創出にとどまらず継続的な学習に寄与していくため、継続的に知識を得ることの楽しさを感じ得る利用者目線にたったより活用が推進されるツールを作成することができたと考えられる。なお、社会実装にかかる調査に関しては、当初は静岡市認知症ケア推進センター「かけこまち七間町」の利用者のみを対象と考えていたが、大学生等、若い世代を対象として幅広く意見収集を行ったことから、世代間を超えた意見を収集し、より汎用性の高いツールであるか、興味を持つ内容であったかなどの検証を行うことが可能となった。

### (3)実績・成果と課題

研究で得られた結果についてまとめると主に以下の通りである。

認知症の正しい理解の促進に寄与するWebサイトについては、認知症について簡単に学ぶ事ができるよう、上記3つの軸それぞれについてクイズとその解説ページを作成した。クイズは○×形式と択一選択形式の2種類を用意した。解説ページは、このページ単体でも活用してもらうことができるよう、クイズへの回答を前提にはしていないものの、クイズの解説として活用することで、より理解が深まるような流れとした。さらに、認知症への備えとして活用できる各種制度については、それぞれに対応するボタンを用意し、クリックすると該当する制度の概要が表示されるような機能とした（図1）。

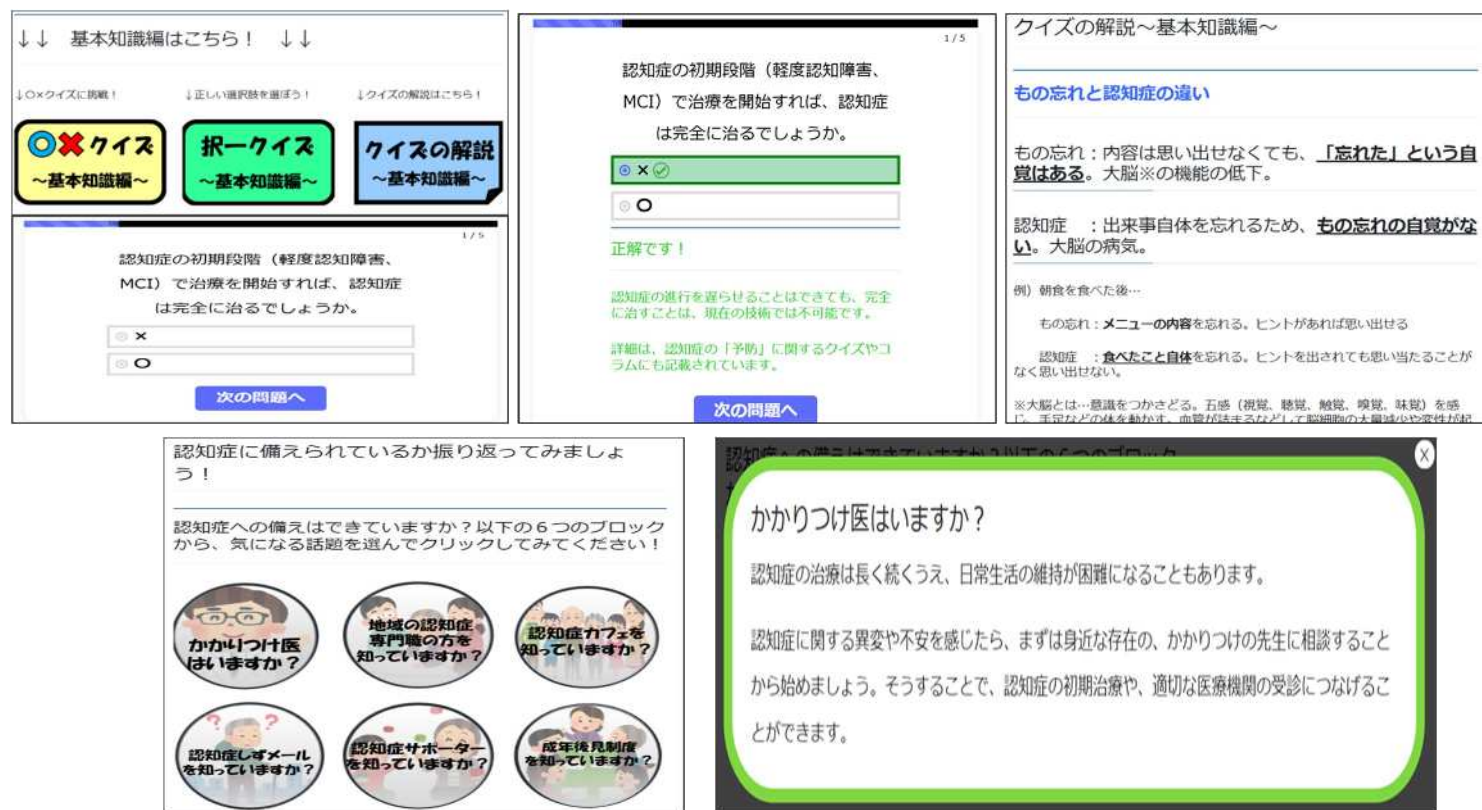


図1 基本知識編部分のクイズ選択画面とクイズおよび解説ページの一例

また、コンテンツの内容は短い文章かつ自身で考えてもらうことで、楽しみながら学ぶ状況の創出を目指した。また、幅広い世代の方に親しんでもらうべく、用意したコンテンツはどれも、文字の大きさや内容の簡潔さに配慮したものとしている。本Webサイトの活用から、認知症に関する情報収集を、時間や場所に制限されず、手軽に行うことができるような仕組みにした。

さらに、具体的なWebサイトの構築にあたっては、Webサイトの保守・運用においてプログラミング知識の要らないWordPressを使用することで更新、レイアウトの変更など、Webを管理する側にとっても容易に情報の管理がしやすくなったという点においても、大きな成果があったといえる。

構築したWebサイトについては、認知症への関心が創出されたか、また今後継続して情報収集を行う意欲に働きかけることはできたのかを確認するために、静岡市認知症ケア推進センター「かけこまち七間町」で展開されているイベントに参加した方や静岡県立大学の学生、およびその周辺地域住民、「20代以下」21人（42.9%）、「30代」6人（12.2%）、「40代」1人（2.0%）、「50代」2人（4.1%）、「60代」3人（6.1%）、「70代」11人（22.4%）、「80代以上」5人（10.2%）に対し、構築したWebサイトの内容を見ていただき、アンケート調査を実施した（図2）。その結果、アンケートの回答者の約7割以上の方が使ってみたい、関心は高くなると思うなどの評価を得ることができ、構築したWebサイトやクイズを通じ、認知症への関心が生まれ、継続的に利用される可能性を確認することができた（図3）。



図2 学生によるアンケート調査の様子

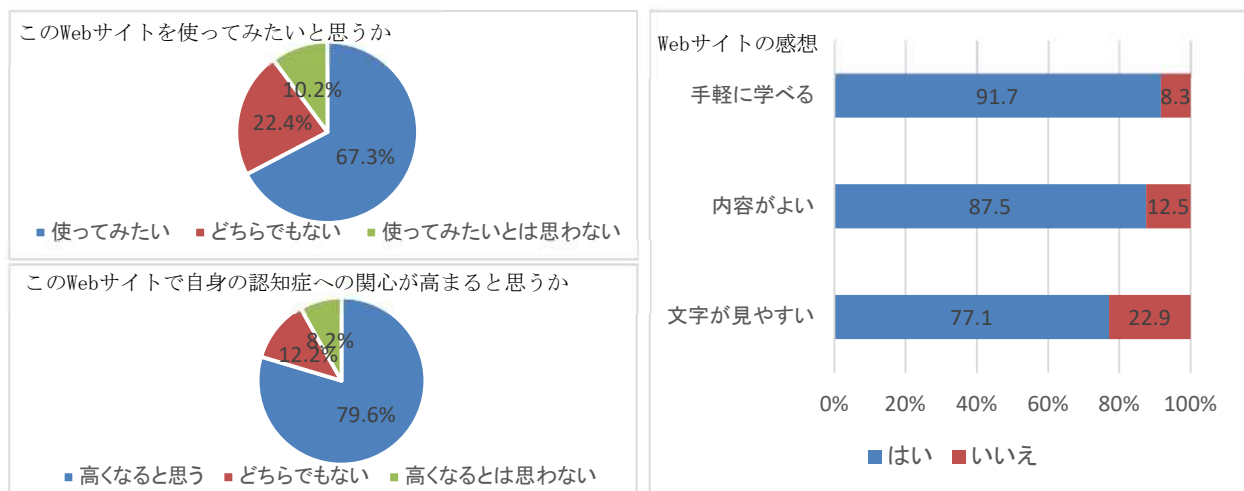


図3 アンケート調査の結果の一部 (N=48)

#### (4) 今後の改善点や対策

本研究の結果から、構築したWebサイトによる認知症に関する情報や知識の習得については、その必要性は高く、学習意欲を高めることが明らかになった。また、情報の入手の仕方について、これまでのチラシやパンフレット、口コミなどとともに、こうしたWebサイトを利用した情報発信のツールがあらたな情報伝達の手段として有効かつ幅広い層への周知が可能であることも明らかになった。

今後の課題として、地域の活動と連動するコンテンツ、興味が湧くような動画解説や仮想体験のコンテンツを含めることができればより充実したサイトとなり、今後検討していく必要があると考える。

#### 5. 地域への提言

調査結果から、「知らなかった内容についての知識欲が高まっている」「既知の知識に関連する機関や取組への関心が高まっている」「認知症の方との接し方については知っていて、その状況を共有できる認知症カフェや、さらに学びを深められる講座への出席意欲が高まった」という意見もあることからWebサイトと実際に地域で展開している活動との連動性をどのように高めるかが課題となる。

#### 6. 地域からの評価

アンケートなどの評価の中で、このようなツールを用いて、認知症の内容を未だ深く知らない地域住民が自分自身でその知識を深めることで地域の認知症高齢者支援の一助となりえること、年齢層や時間の制約などを受けずに取り組めることから、今まで情報が届かなかった層への情報発信の仕組みづくりが可能となったことなどが地域の評価として得られた。

最後に、研究全般において多大なるご支援をいただいた石井利奈氏をはじめご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。